

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2015～2017

課題番号：15KT0130

研究課題名(和文) 常態化した紛争が生成する新たな社会関係：メキシコ先住民運動を結節点として

研究課題名(英文) Producing new social relations through "normalized" conflicts: focusing on the mexican indigenous movement.

研究代表者

佐々木 祐 (Sasaki, Tasuku)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：90528960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：新自由主義的経済再編にともなう社会的混乱と、政治システムの機能不全による社会的アパシーが蔓延するメキシコ合衆国において、「公的」なかつての制度に依存するのではなく、様々な場において社会関係全般を異なる形で再編成する試みについて調査を行った。六度にわたるフィールドワークにより、まずチアパス州における先住民運動が、地域的・民族的制限を遙かに超え、新たな形で「ナショナルなもの」構築につながっていることを明かにした。さらに、そうした動きが他セクターにおける取り組み、特に移民支援運動に密接に関連していることも示した。

研究成果の概要(英文)：In Mexico, the social turmoil accompanying neo-liberal economic restructuring and social apathy due to malfunction of the political system have produced the attempt to reorganize the whole in different forms of social relations. I investigated this phenomenon through fieldwork. First it revealed that Indigenous movement in Chiapas state has exceeded regional and ethnic restrictions, leading to the creation of the "national" in a new form. It also showed that such movements are closely linked to efforts in other sectors, particularly the immigration support movement.

研究分野：社会学

キーワード：紛争 先住民 移民

1. 研究開始当初の背景

メキシコ合衆国においては、主に政治システムの機能不全と新自由主義的経済再編に伴う経済的格差・貧困の拡大がこれまで以上に大きな問題となっている。その結果、治安の悪化が常態化する一方、永続的な貧困状態から脱出するために犯罪へと進んで身を投じる者も増加している。またそうした状況に対する自衛策としての住民が武装化する事例も見られ、それに対する弾圧といった暴力的な事例も拡大している。このように、公共領域において発生したコンフリクトが、次第に私的・日常的な諸領域を侵食し包摂しようとしているわけである。

だが非常に興味深いことに、こうした「紛争の常態化」は社会の分断やアノミー化を意味しているわけでは必ずしもない。むしろ、そうしたネガティブな社会状況を奇貨として、従来であれば無関係であるとされてきた個別の事象(先住民、マイノリティ、障害者、年金生活者、失業者、若者、移民など)の間に新たな対抗的・自己防衛的ネットワーク生成がなされようとしているのである。これに対し、従来個別的な研究はなされてきたものの、その相互作用について実証的に調査を行う試みはほとんどなされてこなかった。

2. 研究の目的

こうした新たなネットワーク構築の自主的な流れ一つの結節点として、本研究ではメキシコ南東部・チアパス州におけるマヤ系先住民運動(サパティスタ運動)に注目する。1994年の武装蜂起以降、メキシコの周縁領域に根拠地(「叛乱自治区」)と独自の統治システム(「カラコル」と「善き統治評議会」)を構えながら、「もう一つのメキシコ」構築の必要性を訴えて活動を続けるサパティスタたちは、その地理的・民族的制約を超え、メキシコ国内における反システム運動・オルタナティブ運動において参照・言及されている

からである。その具体的な連携の様相や相互作用について、フィールドワークをもとに調査分析を行うことが本研究の目的であった。

この研究を通じ、全般化・常態化した社会不安という共通条件を背景として、それ自体としては別個の課題を追求している諸運動体の間に緊密な連携が生成しているというユニークな事例についての詳細な知見を得ることができる。こうした新たな関係構築については、いわゆる「新しい社会運動」論においてもしばしば指摘されている、メキシコの場合はそれぞれの運動体の異質性が極めて大きく、とうてい通約不可能にさえ思えるほどであることにその特色がある。

また、その結節点がいわゆる「ナショナル」な運動体ではなく、メキシコ周縁部における先住民運動というきわめてエスニックかつ地域的なものであることにも注目しなくてはならない。つまり、こうした連携構築の過程で、同時に「われわれ」「メキシコ人」といったアイデンティティの問い直しや再構築・再定義が行われようとしているわけである。こうした極めてユニークな現象がもたらす効果やその作用についての知見も得ることが本研究の目的であり、それは狭義の地域研究や社会運動研究に限定されるものではないことも指摘しておかなくてはならない。

3. 研究の方法

研究方法としては、メキシコにおける現地調査、とりわけチアパス州における先住民自治共同体(サパティスタ運動)での現地調査と、メキシコシティにおける移民・難民支援施設を対象としたフィールドワークが主たるものとなる。こうした調査を通じ、まずは日常化したコンフリクトのさなかで生きる人々の経験と語りを収集する。また、そうした運動に関与する当事者や支援者の語りにも着目することで、運動がどのように形成されたのか、またそれがどのように他運動に影響

響を及ぼしている・及ぼされているのかについても調査を行う。

サパティスタ運動については、その性質上直接のインタビューを行う可能性は限定されているが、サパティスタ自治区における1週間程度の参与観察を数回行い、運動が日常においてどのように編成され、またどのように意識されているのかについて探る。武装蜂起から20年以上経過した現在、自治区住民の多くは「サパティスタ自治以前」を知らない新しい世代となりつつある。こうした「紛争という日常」を生きる者たちが、その生活をどのように位置づけているのか、また外部との関係をどのように意識しているのかを調査分析する。

また、移民・難民に対しても、移動を常とするこうした人々についてのまとまったデータを取得することは難しいとされていた。だが本研究においては、「さしあたり」移動を中止し、メキシコにおいてより良き生やさるなる移動の機会をうかがう移民の支援施設での参与観察を行うことにより、一定程度の広がりをもった定性的データを収集することが可能となる。同時に、参与観察も実施することにより、移民達の社会関係構築の具体的な様相や、支援運動を含む諸運動がいかに連関しているのかについて探ることが可能となる。

また、彼らが対外的に行なうイベントや他組織との会合にも同行し、多様な人々との出会いのなかで、どのような関係性が生成しているかを調査分析する。こうして、紛争を共通項とした人々が相互に作りあげるネットワークの構造とその社会的機能についてのデータを収集し分析を行う。

このように、一見全く無関係とも思える社会運動を内部から観察することにより、そこにある種の「心情」としての共通軸があることをあぶり出すことができるわけである。

4. 研究成果

上述したような研究目的・研究方法は、3年間の調査期間においてほぼ十全に遂行されたといってよい。こうした調査研究により、まず以下の二点が浮き彫りになった。

- 1) 紛争状況にある社会において、フォーマルな領域外に多様な社会関係が生成していること
- 2) 一方で、そうした諸関係が公的な領域のある種の共通回路として結合しうるといいう可能性も存在していること。

ただし、公的統治の不全およびそれに対する社会的不信のため 第二点の要素はきわめて弱いことも明白になった。また同時に、極端な政治からの撤退(棄権や情報遮断)の傾向が社会的に強まりつつあることと、形成されつつあった各運動組織間の連携がそうした潮流のなかで再び脆弱化する危険性も明らかになった。とりわけ、メキシコ国内における社会運動研究においては、この側面を強調するものが多く見られるのも事実である。だが、先にあげた共通の「心情」が存在していることは調査により明らかにすることができた。それが直ちに具体的な運動の連携を生成するとはもちろん言うことはできないが、そうした関係構築を担保し保障するようなものとして、サパティスタ運動が存在していると結論づけることができる。

さらに、メキシコシティの難民支援施設“Casa Tochan”における聞き取りおよび参与観察の結果、治安・経済要因により「さしあたり」自国を脱出した中米移民が、移動の過程でメキシコ社会からの周縁化と支援・連帯という二重の社会的経験を経ることにより、不断に自らの存在や行方について検証を強いられていることが明らかとなった。あるものは難民として生きることを、またあるものはテンポラルな滞在者として、またあるものは

メキシコにおける非正規労働者として生きることを選択するようになる。

このように、一様に「北(アメリカ合衆国)」をまなざして移動を続ける移民の流れの近傍に、別様の流れや滞留が生じていることが実証的に確認された。

また、こうした動きに対する支援運動において、しばしばサパティスタの言説やレトリックが意識的・無意識的に使用されていること、さらにそのメンバーにもサパティスタ運動の支持者・元支持者が多く含まれていることも確認された。

また、2017年1月には、計画通りチアパス州にてサパティスタ民族解放軍および全国先住民議会主催の会議にも参加し、大統領選へ向けた新たな運動方針が採択される課程についても調査を行った。その際、依然としてメキシコ国内における運動(とりわけ強制的失踪者および移民)との連携が強く志向されていることが改めて観察された。

こうして、一般化した社会的不安と大きな社会再編のもとで、かつては別個のものとして位置づけられていた諸問題・取り組みが、思いもよらない形で連関され直されていることの現状とその作用についての知見を豊富に得ることができた。



写真1 Casa Tochan における聞き取り調査



写真2 市民団体の先住民女性大統領候補支援運動(メキシコシティ)



写真3 全国先住民議会大会(チアパス州・オベンティック)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

佐々木祐、「縦深国境地帯」としてのメキシコ：中米移民をとりまく空間編成と社会関係についての試論、Contact Zone、査読無、009、2017、242-263

佐々木祐、移動する身体：メキシコにおける中米移民の現状から、社会学雑誌、査読無、33、2017、69-89

[学会発表](計1件)

佐々木祐、縦深国境地帯における生：メキシコにおける中米移民、日本ラテンアメリカ学会、2017、

<http://hdl.handle.net/2433/228323>

〔図書〕(計1件)

佐々木祐、紀伊國屋書店、現代地政学事典・項目：「自治区を構成するサパティスタ民族解放軍」、掲載決定済

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 祐 (SASAKI, Tasuku)

神戸大学大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：90528960

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()